

三木山森林公園の鳥類相— 2004 ~ 2009 年の観察記録—

楠瀬雄三 (ひとはく地域研究員)・三木山森林公園野鳥調査グループ

はじめに

三木山森林公園は周囲を田畑や宅地に囲まれ、孤立した森林となっている。その面積は約80haであり、公園内には、樹林のほかに水辺や芝生、広葉樹の林、針葉樹の林、あるいは混交林が存在し、その樹種構成も豊富である。

野鳥が出現する時期、場所などは日により年により異なり、その状況を把握するには複数年にわたるモニタリングが必要となる。本発表は、2004年9月から2009年3月までの間、三木山森林公園野鳥調査グループが行ってきた鳥類調査をとりまとめたものである。

調査方法

公園内に8本の調査ラインによって公園内を8地区に区分し、ライン上を約900m/時間で歩きながら、目撃、囀り、地鳴きによって野鳥の個体数と種類数を記録した。調査は2004年9月から2009年3月の毎月2回、午前中に行った。

結果

約5年間の調査で31科107種が確認された。通年を通して調査した2005年度から2009年度の期間で最も種数が多かったのは2005年の77種であり、最も少なかったのは2009年の66種であった。また、主成分分析による出現種の類似性の比較から2009年度は他の年と著しく種組成が異なっていた。年度間の種組成の違いを χ^2 検定の残差解析によって抽出したところ、2009年度は他の年度と比較してヒヨドリ、ウグイス、スズメ、ムクドリなどの出現割合が有意に高く、トビ、カケス、ヒガラ、ジョウビタキ、アオゲラなどの出現割合が有意に低かった。約5年間のうち、出現個体数が有意に減少した種はなかったが、ウグイス、シロハラ、ハシブトガラス、モズなど7種は個体数の増加が認められた。8地区の種組成からクラスター分析した結果、樹林性の鳥が比較的多く出現したのが5地区あり、草地・疎林性の鳥と水辺の鳥が多く出現したのがそれぞれ1地区、出現種の特性に偏りが無かったのが1地区であった。

まとめ

生物の出現には季節性や年変動があるため、ある場所の生物相を把握するには複数年にわたり同じ方法による調査を行う必要がある。そのため、三木山森林公園調査グループでは、毎月2回の調査を4年9ヶ月にわたり行った。これにより、鳥類の生息環境としての三木山森林公園の特性が把握できたと考えられる。このデータは三木山森林公園の今後の維持管理方針に重要な基礎となるばかりでなく、三木市周辺地域の鳥類相を調べて考察する際に比較しうる基礎データとして重要な意義を持つものである。